

山上の変貌

マタイによる福音書

17章 1-13節

出エジプト記

34章 29-33節

武田真治

一、こんなこと本当にあるの？

よく言われていることに、マタイによる福音書の十六章後から十七章にかけては、この福音書の前半のクライマックスであるとか、分水嶺であるなどがあります。そして、それだけにその理解が難しいとも。

今日の十七章から始まる出来事もほとんどの註解書が『この変貌物語は解釈がむずかしい』とか『現代の読者にとってイエスの変貌物語は新約聖書でも最も理解困難なものの一つである』と前置きをしながら解説を施しています。おそらく、イエス様が山の上で光り輝いたり、死んだはずのモーセやエリヤが現れたり、天からの声が聞こえたりすることにまず戸惑い、本当のことだろうかと首を傾けてしまうからでしょう。

しかし、実は私はそれ程、この出来事の理解については、難しくないと考えています。

といいますのは、このようなことはあり得ることだと思っからです。

二、私たちにもあり得る

同じような経験を伝道者パウロもしています。彼がまだユダヤ教徒の頃、クリスチャンを迫害するためにダマスコという街に急いでいる道の途中で突然、天からの光が射して来て彼を包み、天からの声を聞いたのでした。『サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか』というイエス様からの声でした。そして『あなたはどなたですか？』というパウロの言葉にも『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ』とも告げられたのでした。この出来事が、彼の人生を百八十度変換させて、彼はキリスト教の伝道者となっていったのでした。

その時、パウロのそばには他の人達も同行していたのですが、彼らにはイエス様の姿も見えず、声も聞こえなかったのです。パウロだけがイエス様の姿を見、その声を聞いたのです。それは彼の見た「幻」だと言われるならばそうかもしれません。しかし、その体験はパウロにとっては紛れもない事実であり、だからこそ自分の生き方を全く変えてしまうことが可能だったのです。

今日の箇所が登場している三人の弟子たち（ペトロ・ヤコブ・ヨハネ）にとって、この出来事

は一方で人から見れば「幻」と言われても仕方がないことでした。『彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった』のですから。しかし、彼らにとっては紛れもない「事実」、実際の「体験」であったのです。

実際、この中の一人ペトロは他の箇所でもこの時の体験を自ら語っています。それはペトロの手紙2、一章十六節以下の言葉です。

即ち『わたしたちはキリストの威光を目撃したのです。荘厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声があって、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。わたしたちは聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです。こうして、わたしたちには、預言の言葉はいっそう確かなものになっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意しててください』です。

これは自らの体験の証言・証しです。更にここで教えられることは、『明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、預言の言葉に留意して』と語っている点です。

これは、ペトロが経験したのと同じような体験が私たちにもいつか可能であると語っている言葉です。私たちも主のお姿を目の当たりにすることが出来、主のお声をお聞きする時が来ると。この時とは最終的には、天のみ国に於いてのことでしょう。しかし、ペトロが体験したことと、この彼の言葉は、この地上に於いてもそのような恵みの時を垣間見れることがあるかもしれないという希望を与えてくれているのです。それは私たちにも可能なことなのだ。

その時のために為すべきこととして、彼が挙げていることが『預言の言葉に留意している』ことだと教えてくれているのです。預言の言葉とは聖書のことです。

即ち、聖書のみ言葉に注意深く聞いていく時に、私たちにも天からイエス様の声が響いてくるかもしれないのです。主がお姿を見せて下さるかもしれないのです。

三、この礼拝の時にこそ

その意味で言うならば、まさしくこの礼拝の時に、ここで聖書のみ言葉に聴いているこの時に、天からのイエス様の声を聞く時が与えられるのです。聖書の言葉をまさしく自分に語られた言葉だと心から思われる瞬間が。その声を通して主を拝む瞬間があり得るのです。

「山上の変貌」の出来事は、その時そこにいた三人の弟子たちだけの特殊な体験ではなく、現

代に生きる私たちにも起こり得る出来事です。それはたとえ今、その隣にいる人には聞こえなくても、他の人から見れば単なる幻に過ぎないと言われようとも、私にとっての真実な出来事と言える、そのことで自分の人生が変わってしまう程の経験をするにはあり得るのです。そしてその出来事を、自分にとっての実体験と証言できるような時が。

この「山上の変貌」もよく読む時に、これが「礼拝の時」であったことが分かります。少なくとも「祈りの時」でありました。

一節の最初の言葉として、わざわざ『六日の後』とあります。六日経った後の日は「七日目」です。神様が安息なさった日にちです。

更に『ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。』ということも、これと全く同じことがこの後、二六章三十七節に出てきます。それは「ゲッセマネの祈り」の時です。高い山にこの三人をイエス様が連れて行かれる時は、祈りと礼拝の時でした。

次の『モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた』という言葉も、旧約聖書の律法を代表するモーセと預言者の代表であるエリヤが各々の思いや考え、本質をイエス様に伝えているとも考えられます。旧約聖書の二大テーマである律法と預言を踏まえ、その本質を知った上でイエス様は語っておられると言えるのではないのでしょうか？

この様子を目撃していたペトロは思わず『主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです』と口走ります。このペトロの言葉にはいろいろ問題があると言われているのですが、少なくともここで「仮小屋」とは旧約聖書の「幕屋」のことで、十戒の入った箱を安置するテントのことです。後にこれがエルサレム神殿となりました。ということは、ここで彼は礼拝する場所を建てましょうと言っていることになります。ずっと三人をここに留めておきたかったというペトロの思いの表れかもしれません。

しかしそのペトロの言葉を遮る形で天からの声が響きます。

『ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者、これに聞け」という声が雲の中から聞こえた』のです。

まさに「仮小屋を建てる」という愚かな考えを中断させ、そのような建物ではなく、イエス様に聞くこと、そのみ言葉に聞き従うことこそ、あなたがたの為すべき礼拝であると天から教えられたということではないのでしょうか。この声を耳にした彼らは『これを聞いてひれ伏し、非常に

恐れた』のでした。この「ひれ伏す」とは「礼拝した」とも訳せる言葉なのです。祈りと礼拝の只中に於いて、この三人の弟子たちは、イエス様の栄光の姿を見、天の声を聞いたのでした。

四、イエス様のまことの姿

その点で言えば、ここでのイエス様の姿も特別な姿とも言えないように思います。

今日もう一箇所読みました出エジプト記三十四章の方で、シナイ山で十戒の二枚の板を神様から授かったモーセが、山の下で待っていたイスラエルの民のもとに帰ってきた時、彼の顔から光が放たれていたとありましたが、そのモーセの姿とは根本的に違ってしています。モーセの場合は神様と出会ったことで、その光に照らされた結果であったのですが、ここで『イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、福は光のように白くなった』のは、イエス様が自ら発する光の姿です。まさに「太陽のように輝く」姿です。

よくこの出来事はイエス様の「変貌（＝姿が変わること）」と呼ばれるのですが、しかし、これはむしろ本来のイエス様のお姿に戻られたということではないでしょうか？

ここでのお姿は天のみ姿です。あるいは、この後の復活後の天でのお姿を見せてくださったということでしょう。その意味では、イエス様の真のお姿を彼らは見たのです。

人に蔑まれ、侮られ、そして十字架に架けられて殺されていくこれからのイエス様のお姿の背後に、真の栄光に輝く神の子としてのお姿を持っておられること、まことの人にしてまことの神であられるイエス様の天でのお姿を彼らはまさに信仰の目によって「見た」のです。

祈りと礼拝の只中に於いて、この弟子たちは、イエス様の本当の姿を見、本当の声を聞いたのでした。そしてそれは私たちにも可能なことであると、そしてそこで見るべきものは「主の天のお姿」であると。

五、二人または三人集まる場所

イエス様は『二人または三人が、わたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいる』と約束して下さっています。

この言葉の通りに、イエス様の名の下に集まっているこの礼拝でこそイエス様にお会いすることができ、その御声をお聞きすることが可能なのです。今日の箇所の三人の弟子たちと同じように。

私たちは何を求めてこの礼拝に出席しているのでしょうか？

単に聖書のお勉強をしたいのならば大学に行けばよいでしょう。あるいは図書館に行けば、より専門的な聖書や語学の解説書があります。

何のために私たちはこうして集まっているのでしょうか？

それはここでイエス様に出会いたいからではないのでしょうか？自分へのみ言葉を聞きとりたいからではないのでしょうか？力に満ちたイエス様からの天からの「癒し」と「罪の赦し」を与えて頂きたいからではないのでしょうか？

聖書から、生きる模範としてのイエス様の姿を学び、イエス様の生き方に見習って生きようとするために聖書を読むだけでは、実はまだ半分でしかないと思います。この礼拝はそれだけのことのためにあるものではありません。ここでこそ、今も生きて働いておられる天の主イエス・キリストに触れ、その天からの御声を与えられることが許されているのです。そうであるならば、その良き経験をここで共に求めて行きたいと願わずにはおれません。

今日の箇所、天のみ声に恐れ、ひれ伏した弟子たちに『イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない』』と言われました。まさに、直にそのイエス様が触れて下さる体験をも彼らは為したということです。

なんと素晴らしいことでしょうか？そのような体験が、今ここで私にも起きるかもしれないのです。『恐れなくて良いよ』と言って手を差し伸べて励まして下さることがあるかもしれない、そう考えますと本当にうれしく楽しいことです。私はそう思います。その経験がこんな私にも与えられる時を待っているのです。

(礼拝説教より抜粋)